⑩ 黒江塗りを守ろう

私は、伝統工芸としての黒江塗りに興味を持ったので、黒江塗りをしているおじさんをたずねました。

すると、おじさんは、今まで続いている黒江塗りを守ってくれた人の話をしてくれました。

今からずっと昔のことや。紀州の村むらでは夏の間、雨も降らず作物がかれてしまい、人びとは毎日のように食べ物が足らず、うえ死にする人もいたんや。

漆器作りの村、黒江では、特に食料となる米以外に、わんを作る材料であるのりの米がなかなか手に入らず、たいへん困ったんや。そのために漆器作りをあきらめて、ほかの土地へにげ出す人びとの数もふえていくばかりでね。このままでは黒江の漆器作りはほろびてしまうと、村の人たちは気が気じゃなかっ

黒江漆器

たんや。
「どうしたらいいんやろ。」と、村のよりあいも何回も開いて、みんなで考えたけど、よい考えも見つからず、ほとほと困りはててしまってね。
そんなときに、漆器職人の重根屋伊七という人が思いあまって、
「直訴して、殿様にお願いしてみよう。わんの原料としての米をゆうずうしてもらおうじゃないか。」
「そんなことしたら、伊七さん死罪になるぞ。」
と、村の人びとは言ったんじゃが、
「ここはひとつ、わしに任せてくれないか。」
と、伊七は言い切ったんや。とうとう村の人びとは、黙りこんでしまった。
伊七は、もうすぐ殿様が近くの和歌川の川ぶしんの様子を見に来ることを知っていたので、その時にお願いするしかないと、心に決めていたんや。
伊七はそのことを村人に話すと、三十八人が伊七の考えに賛成して八月十二日に決行することになったそうや。
その日、空はどんよりと曇り、風ひとつない暑い日やった。いよいよ黒江村の三十八人の一行は、和歌川へ向かって出発したんや。伊七は、夜も寝ないで

書きあげた直訴状をふところにしっかりと抱いてな。みんなで伊勢子山明神に無事悲願がかなえられるようにお祈りしてから、その日の計画を打ち合わせたそうや。せみの声が辺りにひびいて、みんなはもくもくと川の堤へ歩いて行ったんや。和歌川に着いた一行は、工事に使う俵の陰に隠れて殿様の行列をじっと待っていたそうや。

すると、

「下にーい。下にーい。」と、殿様のおともの声が聞こえてきたんや。

そして、ちょうど殿様が目の前にさしかかったとき、伊七は殿様の前に出て、直訴状を差し出したんや。

「伊七、一生一代のお願いでございます。黒江の漆器、生死の境でございます。なにとぞ、この願いをお聞き入れ下さるよう、お願いします。」

と、必死に頼んだんや。
とものさむらいたちは、今にも伊七たちを切り殺そうとする勢いやった。
伊七たちは、身をこわばらせ、殿様のことばをじっと待っていたんや。
その待つ時間の長いこと……。
すると、
「取り上げてつかわせ。」
と、殿様の声がみんなの耳にひびいてきたんや。それを聞いたしゅんかん、伊七たちのほおにはとめどなく涙があふれてきたんやて。
伊七たちの直訴は受け入れられ、お城からお米をゆうずうしてもらうことになったんや。
そのおかげで、黒江の人たちは命を救われ、黒江漆器を続けることができたんやで。
でも、今になってこの仕事を若い人たちがついでくれないのが、とてもつらいんや。このままだと黒江漆器がすたれていくかもしれやんな。
と、最後におじさんは、さびしそうに言いました。